20030

MCLSに対しSTENT留置し、ISRにて再治療を施行した臨床経験～FFR及びCFRによる検証～

【はじめに】当院では川崎病患者（以下MCLS）に対し、Rotablatorによる治療を積極的に施行している。当院での治療法は原則、Ballooning及びSTENT留置はしていない。

【目的】MCLSに対する再治療の臨床経験を、FFR及びCFRを用いて検証を行った。

【対象及び方法】患者は34歳男性。RCA（#1）に対しRotablator後にSTENT留置（以下STENT時）し、6か月後にISR（以下ISR時）にて再治療となった。術前・術後で部分血流予備量比（以下FFR）及び冠血流予備能（以下CFR）の計測を施行した。

【結果】STENT時はRota Burr（2.0mm）にて切削後、Promus（3.0mm×28mm）を留置した。Preの平均FFR：0.84・CFR：1.1であったが、Postでも平均FFR：0.85・CFR：1.5と、大きな効果が得られなかった。ISR時ではPreのFFR：0.50・CFR：1.0と低下しており、PostのFFR：1.00・CFR：2.1と改善が得られた。

【考察】MCLSではhyperemiaによる血流の増加が、末梢冠血管の拡張予備能の低下及び、微小血管障害により得られていない可能性が考えられ。しかし、血行再建後の時間経過によって、改善される可能性があると思われる。

【結語】血行再建後に血管障害が改善する可能性が示唆された。MCLSに対する治療予後に関する情報は未だ乏しく、今後更なる検証の必要性を感じた。

評価１	評価２		評価３		採否
発表日時　月　日（第　日）	ｾｯｼｮﾝ		会場		時　分～　時　分

受付番号 [　　]　　演題番号 [　　]